

正倉院本『一切経音義』について

李 乃 琦

1 はじめに

中国の唐代に玄奘はインドからもたらされた仏典を漢訳するため、長安に「訳場」を設立した。その中、「字学大徳」である玄応（生没年未詳）は漢訳仏典に大量の難字難語を意識して、「一切経」の辞書を編纂し始めた。いわゆる『一切経音義』である。

『一切経音義』は7世紀に成立し、現存する最古の仏典音義である。全25巻、約450部の経目、9000條の項目が収録されている。『一切経音義』は中国のみならず、日本にも深い影響を与えた。漢訳仏典とともに、奈良時代に日本に伝来した後、盛んに書写された。現在、中国に所蔵されている『一切経音義』の版本に対し、写本はほぼ日本に残されている。その他に、大英図書館やフランス国立図書館には『一切経音義』の敦煌・吐魯蕃断片群が所蔵されている。

石田（1930）によると、『一切経音義』が日本では天平元九年に一部、天平勝寶三年に二部初写された。現在、日本に所蔵されている写本は10種類以上である。現存する諸本では、正倉院本は書写年代が最も古いものである。山田（1932）によると、正倉院聖語蔵にある一切経音義巻第六の断簡は天平頃の書写である。それ以外、正倉院には、巻第四、十七～二十二の7巻が存する。¹

本論では、『一切経音義』諸本で書写年代が最古の正倉院本を研究対象とし、諸本との対照を通して、正倉院本の実態を考察する。

2 『一切経音義』日本古書本

2.1 『一切経音義』について

¹ 奈良帝室博物館正倉院掛（1929）『正倉院聖語蔵経巻目録』pp. 105-106.

『一切経音義』の編纂形式について、小林（1981）は次のように述べている。

初唐の一切経五百五拾余部について、各経ごとに所出順に字句を抽出して挙げ、それぞれに音注、義注及び字体注を加えたものである。

一切経音義各巻の最初に「一切経音義巻第〇」の形式で巻を表し、その後の目録で、この巻に各経に配された経目名の全体を見渡せる。その後の本文に各経の経目名・掲出語・注文が続く構成になっている。

七寺本『一切経音義』巻第十八を例として、巻の始まりには「一切経音義巻第十八」とある。それに続き、巻第十八に収録した経の経目名の目録がある。本論では、それらを目録経目名という。目録経目名は「成實論、鞞婆沙阿毗曇論、解脱道論、雜阿毗曇心論、立世阿毗曇論、尊婆須蜜所集論、法勝阿毗曇論、四諦論、阿毗曇心論、分別功德論、甘露味阿毗曇論、辟支佛因縁論、三法度論、十八部論、明了論、隨相論」である。

その後は、本文の経目名から始まり、本論では、本文の所属を表す経目名を「本文経目名」という。七寺本『一切経音義』巻第十八では、最初の本文経目名は「成實論」である。その後、巻第十八の最初の項目を挙げる。

例1 <斲斧> 巻第十八 成實論

古文作𣪠、同。竹角反。『説文』：斲、斫也。斲、斤也。

この例では、傍線部分が字体注、波線部分が音注、二重傍線部分が義注である。

2.2 「一切経音義全文データベース」について

筆者は『一切経音義』日本古写本の諸本を照合するため、「一切経音義全文データベース」を構築した。データベースを作成するに際して、利用する『一切経音義』諸本は次のとおりである。（以下の掲出順は書写年代ではなく、現存巻数の多い順である。）

(1) 高麗本：（全25巻。『高麗大藏經』、東国大学校、1976年。）²

² 一切経音義日本古写本はいずれも残巻なので、本論では、完本である高麗本（版本）も研究対象とする。『高麗大藏經初刻本輯刊』（西南師範大学出版社・人民出版社、2012年）を参考資料とする。

(2) 七寺本：七寺蔵本（承安五年～治承三年（1175年～1179年）書写。巻第一～十、十二～十四、十六～十八、二十一、二十三～二十五の20巻が現存している。また、巻第十五は東京大学史料編纂所に所蔵されているので、合わせて21巻が現存する。）

(3) 金剛寺本：金剛寺蔵本（嘉禎二、三年（1236年～1237年）書写。巻第一～四、六、七、九～二十一、二十四、二十五の21巻が現存する。）

(4) 大治本：宮内庁書陵部蔵本（大治三年（1128年）書写。巻第一、二、九～二十五の19巻が現存する。）

(5) 西方寺本：西方寺蔵本（三分の二が平安時代、三分の一が鎌倉時代の書写。巻第一、三～六、九、十三、二十一、二十五の9巻が現存する。）

(6) 正倉院本：正倉院聖語蔵本（巻第十七～二十二は平安時代書写。巻第六の断簡は天平頃の書写。7巻が現存する）

(7) 広島大学本：広島大学蔵本（安元年間（1175年～1176年）の書写。巻第二、三、四、五、十の5巻が現存する。石山寺本の一部分である。広島大学に現存する写本と出所を同じくする写本が京都大学文学部国語国文学研究室蔵本2巻、天理図書館蔵本1巻、反町弘文荘賣立品1巻（現蔵不明）、大東急記念文庫蔵本1巻が存在している。）

(8) 天理図書館本：天理図書館蔵本（巻第九、第十八が現存する。巻第九が院政期の写本、石山寺本の一本である。巻第十八は鎌倉時代の写本である。）

(9) 京都大学本：京都大学文学部国語国文学研究室蔵本（巻第六、七が現存する。石山寺本の一部分である。）

(10) 東京大学本：東京大学史料編纂所蔵本（巻第十五のみ現存する。七寺一切經の一本である。）

以上の写本について、現存巻数についてまとめると、次の表1のとおりである。

巻	高麗本	七寺本	金剛寺本	大治本	西方寺本	正倉院本	広大本	天理本	京大本	東大本
1	○	○	○	○	○					
2	○	○	○	○			○			
3	○	○	○		○		○			
4	○	○	○		○		○			
5	○	○			○		○			

6	○	○	○		○	○			○	
7	○	○	○						○	
8	○	○								
9	○	○	○	○	○			○		
10	○	○	○	○						
11	○		○	○						
12	○	○	○	○						
13	○	○	○	○	○					
14	○	○	○	○						
15	○		○	○						○
16	○	○	○	○						
17	○	○	○	○		○				
18	○	○	○	○		○		○		
19	○		○	○		○				
20	○		○	○		○				
21	○	○	○	○	○	○				
22	○			○		○				
23	○	○		○						
24	○	○	○	○						
25	○	○	○	○	○					

表1 利用した9種類の一切経音義の現存巻数対照表

2.3 正倉院本『一切経音義』巻第六について

山田（1932）によると、正倉院聖語藏にある一切経音義巻第六の断簡は天平頃の書写である。正倉院本『一切経音義』巻第六では、『妙法蓮華経』から難字難語を抽出して注釈を加えた。掲出語を大文字で書写し、その後空白をあけ、注文を少し小さめの文字で書写する。

巻数	高	七	金	西	京	正
6	429	429	428	※191	438	※113

表2 『一切経音義』日本古写本の項目数³

表2のように、『一切経音義』巻第六において、西方寺本と正倉院本が残巻である。「一切経音義全文データベース」の構築に基づき、『一切経音義』日本古写本の諸本対照が可能になる。音義の内容において、掲出語と注文からなる項目の集まりである。正倉院本の実態を考察するため、諸本との対照を行った。その結果、諸本に見られず、正倉院本しか記されていない内容は多数存する。本論では、それらの内容を「独自項目」と「独自注文」という。

「独自項目」は諸本に対し、正倉院本しか見られない項目を指す。それらの項目は掲出語と注文からなっている。

「独自注文」は諸本に同じ掲出語が見られるが、その掲出語に施された注文の一部分は正倉院本しか見られないものである。

以下、他本に見られない内容を独自項目と独自注文にわけ、別々に論じる。

3 正倉院本『一切経音義』の独自項目

正倉院本『一切経音義』巻第六には、8條の「独自項目」が見られる（いずれも京都大学本にも存する）。それらの内容は、そもそも玄応音義祖本に存するものであるか、或は後世増訂されたものであるかを検討するため、前後の項目と仏典本文とを合わせて考察する。なぜなら、一切経音義の見出し語は、辞書としての性質上、仏典における登場順に従い配列されて然るべきものからである。

①<旃檀>

『妙法蓮華経』原文⁴：

悉見彼佛國界莊嚴。於是彌勒菩薩。欲重宣此義。

以偈問曰 文殊師利 導師何故 眉間白毫 大光普照 雨曼陀羅 曼殊沙華 梅檀香風
悅可衆心 (中略) 其聲清淨 出柔軟音

³ ※：その巻が残巻であるため、一部分の内容が存しない。

⁴ SAT 大蔵経データベース (<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>) を参照する。

前の項目：＜以偈＞、後の項目：＜柔栗＞

＜旃檀＞之然反，下徒丹反。經中或作旃檀那，訛也。正言旃那。旃檀有赤白紫等，外國香木也。今有從木作梅非也。／方單／音徒貝反。

＜旃檀＞の前後の掲出語は登場順に従い、經文に存する。そのため、＜旃檀＞の項目は玄奘が仏經の記述を忠実に記録・注釈したものである。

②＜瞻察＞

③＜純一＞

『妙法蓮華經』原文：

珠交露幔 寶鈴和鳴 諸天龍神 人及非人 (中略)

文殊當知 四衆龍神 瞻察仁者 爲說何等

爾時文殊師利語彌勒菩薩摩訶薩及諸大士。(中略)演說正法。初善中善後善。其義深遠。其語巧妙。純一無雜。具足清白梵行之相。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死究竟涅槃。

前の項目：＜和鳴＞、後の項目：＜說應＞

＜瞻察＞古文警，同。初點反。瞻，視也。察，審也。郭璞注：《爾雅》云：察也。所以爲審諦也。

＜純一＞市切反，不離也。亦皆也，全也。《尚書》注云：純一之行是也。

＜瞻察＞と＜純一＞は正倉院本と京大本に見られ、他本には存しない。二つの項目が連続して掲載され、また、前後の項目とも經文の配列と一致する。

④＜懈怠＞

⑤＜族姓＞

『妙法蓮華經』原文：

天人所奉尊 適從三昧起 (中略)

心常懷懈怠 貪著於名利 求名利無厭 多遊族姓家

(中略)如來知見廣大深遠。無量無礙力無所畏。

前の項目：＜適從＞、後の項目：＜無礙＞

＜懈怠＞古賣反，下徒改反。《爾雅》：懈，怠也。集注云：懈者，極也。怠者，嬾也。《釋名》：懈，者懈也，言骨節解緩也。

＜族姓＞藁庶反。《尚書》：方命比族。注云：族，類也。《周禮》：四閭爲族。鄭玄曰：百家也。族亦聚也，姓氏也。

＜懈怠＞と＜族姓＞も連続して出現し、また、前後の項目との配列も経文に従う。

⑥＜蕭笛＞

『妙法蓮華經』原文：

若使人作樂 擊鼓吹角 簫笛琴箏篪 琵琶鏡銅

前の項目：＜作樂＞、後の項目：＜鏡銅＞

＜蕭笛＞古文遂，同。大穿反。七孔簫。俗名高羌笛三孔。

＜蕭笛＞という項目は経文に検証できる。

⑦＜籀＞

⑧＜𠄎𠄎止天余＞

『妙法蓮華經』原文：

鵝鼻雕鷲 烏鵲鳩鴿 蜃蛇蝮蠍 蜈蚣蚰蜒

前の項目：＜鵝鷲＞、後の項目：＜蜃蛇＞

＜籀＞立安反。古文。

＜𠄎𠄎止天余＞漏皆反。新文。

＜籀＞と＜𠄎𠄎止天余＞は『一切経音義』では連続して掲載されたが、経文には見られない。また、前後の項目である＜鵝鷲＞、＜蜃蛇＞の間に、「烏鵲鳩鴿」しか見られない。

＜籀＞は「古文」の記述があり、書体である篆書の一種を指し、多くは大篆と一致する。＜𠄎𠄎止天余＞の字形から考察するのは困難であるが、前の項目「古文」に対して、「新文」の注が施された。書体である篆書から隸書へ展開したため、「隸」での可能性がある。また、反切や異体字との照合を行うと、＜𠄎𠄎止天余＞は「隸」である可能性が高い。

この二つの項目は、書体に対する注文であり、経文との関連性が推測できないので、他本に省略された可能性がある。

4 正倉院本『一切経音義』の独自注文

「独自注文」において、正倉院本に見られるが、諸本に存しない内容は次の7條である。

①<未嘗>

高七金：視羊反。《小爾雅》云：嘗，試也。謂甞爲之也。

正京：視羊反。説文：口味也。《小爾雅》云：嘗，試也。謂甞爲之也。

傍線部は『説文解字』からの引用であり、正倉院本と京都大学本のみ見られる。『説文解字』と照合し、卷五・旨部では、「<嘗>口味之也。从旨尚聲。市羊切 文二 重一。」の記述が見られる。

②<捶打>

高七金：之藁反，下音頂。《説文》：以杖擊。

正京：之藁反，下音頂。《説文》：以杖擊。廣雅捶打擊。

傍線部の内容は『廣雅』卷第三に見られ、『廣雅』からの引用であることが確認できた。

③<肴膳>

高七金：胡交反，下上扇反。《國語》云：飲而無肴。賈逵曰：肴，菹也。凡非穀而食之曰肴。《説文》：膳，具食也。《周禮》：膳用六牲。又云：膳夫。鄭玄曰：膳之言善也。今時美物亦曰珍膳。《廣雅》：肴，膳肉也。字體皆從肉，𠂔又口、善是聲。經文有從食作餽餽二字，檢無所出，傳寫悞也。

正京：胡刀胡交二反，下上扇反。《國語》云：飲而無肴。賈逵曰：肴，菹也。凡非穀而食之曰肴。《説文》：膳，具食也。《周禮》：膳用六牲。又云：膳夫。鄭玄曰：膳之言善。今時美物亦曰珍膳。《廣雅》：肴，膳肉也。字體皆從肉，𠂔又又、善是聲。經文有從食作餽餽二字，檢無所出，傳寫悞也。

傍線部の反切はいずれも「肴」に施された注文である。正倉院本と京都大学本には、

二つの反切が存するが、高麗本、七寺本、金剛寺本には一つしか残されていない。

④縦廣

高七金：足容反。《小爾雅》：表從長也。《韓詩傳》曰‘南北曰縱，東西曰橫’是也。《周禮》：九州之地域廣輪之數。鄭玄曰：輪，從也。廣，橫也。

正京：足容反。《小爾雅》：表從長也。詩云：從摸其畝。《韓詩傳》曰‘南北曰縱，東西曰橫’是也。《周禮》：九州之地域廣輪之數。鄭玄曰：輪，從也。廣，橫也。

傍線部の注文は『詩經』（國風・齊風・南山）を調べ、「蕪麻如之何、衡從其畝。取妻如之何、必告父母。既曰告止、曷又鞠止。」の記述が見られた。そのため、本例は『詩經』を参照したことはほぼ確認できた。

⑤說應

高七金：於興反。《字林》：應，當也。謂根法相稱曰應。

京：於興反。《字林》：應，使奮德傳口應當也。謂根法 稱曰應。

正：於興反。《字林》：應，使奮德傳曰應當也。謂根法相稱曰應也。

『字林』は逸書であり、現在照合できない。また『字林考逸』を調べたが、傍線部が見られない。

⑥倫匹

高七金：力均反。《廣雅》：同、等、輩、倫、匹也。又倫，類也。匹，配也。

正京：力均反。《廣雅》：同、等、輩、倫、匹也。又倫，類也。匹，配也。匹，字從二、從八。八杲一匹、又八亦聲也。

『説文解字』との照合を行い、傍線部の内容は『説文解字』から引用したものであると推測できる。『説文解字』（卷十二・亠部）〈匹〉：四丈也。从八亠。八撲一匹，八亦聲。

普吉切 文七

⑦欸然

高七金：吁勿反。《蒼頡篇》：欸，𠄎𠄎𠄎𠄎起也。

正京：吁勿反。《蒼頡篇》：欸，猝起也。亦吹大聲也。忽也。西京賦云，欸，從背見，陰綜曰欸忽也。

傍線部を考察するに際して、次の三つの文献との照合を行った。

『西京賦』：神山崔巍，欵從背見

『楮白馬賦』：欵聳擢以鴻驚，時濩略而龍翥。薛綜西京賦注曰：欵，忽也。説文曰：欵，有所吹起也。傅玄乘輿馬賦曰：形便飛燕，勢越驚鴻。甘泉賦曰：洒濩略綏蕤。張景陽七命曰：虬踊螭騰，麟超龍翥。

『説文解字』卷八・欠部：<欵>：有所吹起。从欠炎聲，讀若忽。許物切

そのため、正倉院本の注文は、誤写である可能性が高い。「亦吹大聲也」は「有所吹起也」の誤写であり、また、「陰綜曰欵忽也」は「薛綜曰欵忽也」の誤写である。

5 おわりに

本稿では、『一切経音義』日本古写本である正倉院本について検討した。特に、正倉院本巻第六は現存する最古の『一切経音義』古写本として、その独自性が注目される。筆者の調査によると、正倉院本巻第六には、諸本には見られない項目8条と諸本には見られない注文7条が存する。それらの内容を検討し、出典を明らかにすると、独自項目については、ほぼ仏典本文に見られる難字難語であり、配列順も一致する。そのため、もともと玄応音義祖本には、それらの内容が既に編纂されたと推測できる。また、独自注文において、出典を明記した上で、一部分の内容は注文の最後ではなく、中間に記述されたことから、祖本に存する内容である可能性が高い。以上により、正倉院本『一切経音義』巻第六は後世の増訂ではなく、祖本に最も近い実態を持つと推測できる。

参考文献

上田正(1981)玄応音義諸本論考, 東洋学報 63(1・2), pp. 1-28.

于亨(2007)玄応一切経音義版本考, 中国典籍与文化 4, pp. 15-32.

小林芳規(1981)一切経音義解題, 古辞書音義集成「一切経音義(下)」.

佐々木勇(2014)玄應撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について, 訓点語と訓点資料 133, pp. 50-70.

徐時儀(2005)玄応《衆経音義》研究, 中華書局.

張娜麗(2006)京都大学文学部国語学国文学研究室蔵玄応撰『一切経音義』について, 日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」, pp. 37-40.

奈良帝室博物館正倉院掛 (1929) 『正倉院聖語藏經卷目錄』, pp. 105-106.

山田孝雄 (1932) 一切經音義刊行の顛末, 一切經音義二十五卷.

箕浦尚美 (2006) 金剛寺本・七寺本・東京大学史料編纂所・西方寺藏玄応撰『一切經音義』について, 日本古写經善本叢刊第一輯「玄応撰一切經音義二十五卷」, pp. 15-36.

李乃琦 (2016a) 図書寮本『類聚名義抄』における玄応撰『一切經音義』の依拠テキスト『一切經音義』卷第四を中心に一, 訓点語と訓点資料 137, pp. 115-132.

李乃琦 (2016b) 日本古辭書與玄應撰《一切經音義》, 《佛經音義研究》, 上海辭書出版社, pp. 124-139.

李乃琦 (2016c) 玄応音義に関する研究史と課題, 北海道大学大学院文学研究科研究論集 16, pp. 85-98.

李乃琦 (2017) 玄応撰『一切經音義』諸本系統から見た P. 2901, 汲古第 72 号, pp. 13-19.

李乃琦 (2018a) 從《一切經音義》經目名看其系統分類, 東亞文献研究 21, 韓国交通大学東 ASIA 研究所, pp. 119-134.

李乃琦 (2018b) 一切經音義全文データベース構築による平安時代古辭書についての実証的研究, 北海道大学学位論文(博士).

(り ないき 大学院人文社会系研究科 日本學術振興會特別研究員 PD)